

# 中国の大都市

杉野 明夫

## 1. 中国の大都市のタイプ

中国の大都市は、それぞれ様々な特色をもって存在しているが、旧中国の半封建的な、半植民地的な統治のなかで刻印されたいくつかの特徴から見ていくのが妥当だと考えられる。ここにわれわれは、国外の者にとっても馴染みのある西安（かつての長安）、北京、および半植民地都市であった上海、天津、さらに長春（かつての「満州国」の首都であった「新京」）を例にとって、タイプ分けをして考察してみよう。

①封建的王城の伝統をもつ消費都市—北京、西安、開封などであり、これらの都市は近代的工業がないか、僅かしかない。ここでは都市における建造物の配置が荘厳、対称、斉合の性格をもち、とくに城壁をめぐるし、東西南北の道路で画された伝統的都城であり、都市建設史上に独特の価値と位置づけをもっている。

②典型的な半植民地都市—上海、天津などに見られる。近代的工業をもつが、業種の整合性に欠け、基礎が弱い。都市の建築物・施設の物質的・技術的水準は高い。しかし、都市全体に中心がなく、諸外国がそれぞれ設置、形成した租界は互いに連絡がなくて「独立王国」をなし、給水、排水、電力、道路、公共交通などが、それぞれ自分の系統でワンセットをなしていた。

③単一の帝国主義が建設し、前述の②とはちがってインフラストラクチャや建築物などの統一の配置をつくりだした都市で、典型として「新京」がある。ただし中国人はふるい市街で立ち遅れた施設と建築物に居住したままであった。

この三つのタイプ分けは、『人民日報』1954年8月12日の孫敬文論文によるもので、私は今もこの区分が気に入っている。

### (1)西安・北京タイプ

#### ◎西 安（長安）

西安という都市は、中国西北部、陝西省の中部に沃野千里の拡がりを見る関中平原の中央、渭水南岸に位置している。西安の東には秦嶺の北に源を発した河があり、西にも河があり、ともに渭河に注いでおり、灌漑および防禦の利を提供している。気候は温和であり、降雨量も500ミリ前後であり、地勢は平坦で、地質は柔らかくて肥えているため、農業生産に適している。そこで早くも2000年前から、ここには豊かな農業集落が形成されてきた。これに加うるに、東には函谷関、黄河があり、西には隴山があり、南は秦嶺を障とし、北は北山を屏として、進んで攻めるのによく、退いて守るにもよいので、「金城千里」「四塞以って固と為す」と軍事戦略の要衝として讃えられてきた。

このように西安は、古代よりほぼ全国の中心に位置している（関中と称した）上に、地理的環境が経済的および政治的、軍事的に恵まれていたことから、中国史上、最も長い期間、首都となってきた。

紀元前1134年に建てられた西周の豊京と鎬京は、西安地区に最も早く現われた国家の首都であり、その跡地は西安市街から南西へ約10km離れている。この後、秦国は咸陽（西安の西北）に都を定めたが、咸陽の都市の発展は北側へは高原地帯のため制限され、渭水に橋を架け渭水の南岸へ向かわざるを得なかった。咸陽は渭水の南北にまたがる都市であり、かの有名な阿房宮も渭水の南側に位置していた。

秦のあと西漢の長安は、秦の咸陽の離宮跡地に建てられ、当時、城の周囲は約26kmあり、中国の歴史上最初の大都市であった。市街には

宮殿のほか、居住区、手工業区、商業区があった。南北に8の街、東西に9の陌という大通りがあり、何万何千もの世帯が住み、工業と商業が発達していた。西漢の長安は国内の交通の中心であっただけでなく、シルクロードの起点でもあった。

長安は、その後いくつかの王朝の都となったが、隋および唐の代にいたって壮大な都を完成させた。隋および唐の長安城の周囲は36 kmであり、面積は83平方kmに達していた。全体は宮城、皇城、外廊城（京城）の3部分からなっていた。宮城は全城の北側の中心にあり、皇帝・后妃の住まいであり、宮城の南側は皇城であり、官庁の所在地である。一番外側に外廊城があり、東・南・西の3面から宮城・皇城を取りかこむ。（図1）

城壁の四面には城門を3つずつ設け、東西に11本、南北に14本の大通りを作り、縦横の交叉によって碁盤のように（宮城と皇城は含まれず）100以上の区域に区切り、「坊」または「里」と称した。

現在の西安市は、重要な工業都市に生まれかわっているが、昔の長安城の均衡・対称そして碁盤型の町と道路網の配置を受けついでいる。

西安は悠久の歴史を経過して、きわめて豊富な名勝古跡を残してきた。半坡遺跡、秦の兵馬俑坑、秦公大墓、唐塔、碑林、漢・唐の長安城、等等。6000年以前の先住民の労働と生活を再現した半坡遺跡があり、数千体の地下軍団を出現させた兵馬俑坑が存在する。

唐代の長安には日本の遣唐使が学び中国の知識人と交流していた。李白は阿倍仲麻呂（中国名は晁衡）の海難を悼んだ「晁卿衡を哭す」の一首を残した。阿倍仲麻呂の名高い望郷の和歌の漢訳とともに、西安市の公園に建てられた阿倍仲麻呂記念碑に記されている。

哭晁卿衡 李白

日本晁卿衡辭帝都 征帆一片遶蓬壺

明月不歸沈碧海 白雲愁色滿蒼梧

（日本の晁卿は帝都を辞し、征帆一片にて蓬壺（伝説上の日本）をめぐる。明月は帰らずして

碧海に沈み、白雲愁色にして蒼梧（山の名）に満つ。）

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山にいでし月かも

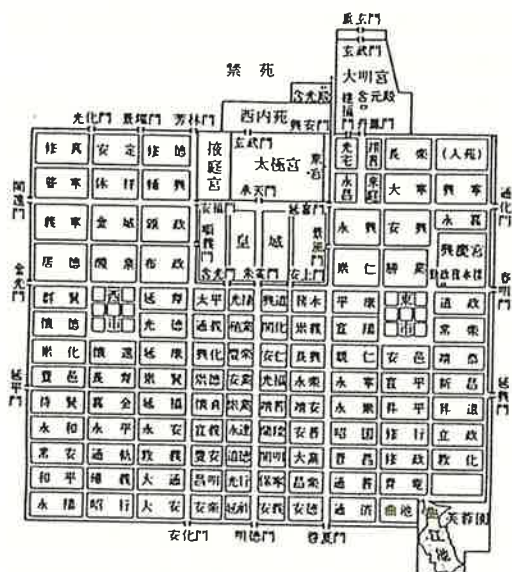
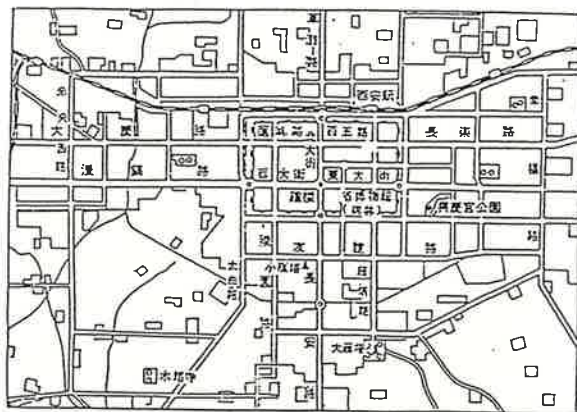
阿倍仲麻呂

翹首望東天 神馳奈良邊

三笠山頂上 想又皎月圓

（首をあげて東天を望めば、神は馳す奈良の辺、三笠山頂の上、想う また皎月の圓かなるを。）

図1 西安略図



附 唐長安城復原図

（『中国古代建築史』より）

## ◎ 北京

北京は宮城である故宮を北の奥に配置し、四方に城壁をめぐるせた城内は東西南北の道路で碁盤状を呈しており、都城の配置では西安と同じタイプに属するとみてよい。

はるか周（BC 1027 年～BC 770 年）の時代、燕は薊城を都にして中国北部に割拠していた。薊は北京小平原に建設され、現在の北京市の一角にあった。北京小平原は東、西、北の三方が山でかこまれ、南だけが平坦で華北大平原に開けており、薊は古くからこの華北大平原と北方山脈後方との南北交通の要衝となっていた。

こうした地理的位置のため、燕が秦に滅ぼされたのちも華北平原北端の要衝であり、その状況は唐代末にいたるまで大きく変わることもなかった。晩唐（9 世紀末～10 世紀初）になって、北方の多くの少数民族があいついで蜂起し、中原の門戸の一つである薊も、その襲撃を受けた。北方の少数民族である契丹族は幽州——後漢時代から薊は幽州と呼ばれ、隋および唐代にも幽州は高句麗遠征軍の基地とされた——とその周辺地区を手中にした。北部中国を制した契丹族は国号を遼と改め、幽州を副都とさだめ、「南京」または「薊京」とよんだ。遼王朝は唐代の幽州城をほぼそのまま受けつぎ大きい都市改造をしなかった、といわれる。

やがて中国北部におこった女真族が、12 世紀はじめ金王朝をうち立て、南下し、燕京を占拠する。金王朝は首都をここにおき、「中都」と改名した。中都是都市を東、西、南の三方に拡充するとともに、都市中央の前方に宮殿を修築した。この宮殿は、「みな飾るに黄金五彩をもってし」とうたわれたほど豪華かつ大規模なものであったが、100 年もたたぬうちにジンギスカンの部隊が侵入して放火され、忽然と姿を消した。

その後、ジンギスカンの孫のフビライは、中都を首都とし、焼け落ちた金の北京城の東北寄りに世界に冠たる宏大な新都を築くことを決定した。この「大都」と呼ばれた都はまる 7 年の歳月を費やして完成し国号を元とよんだ国の首

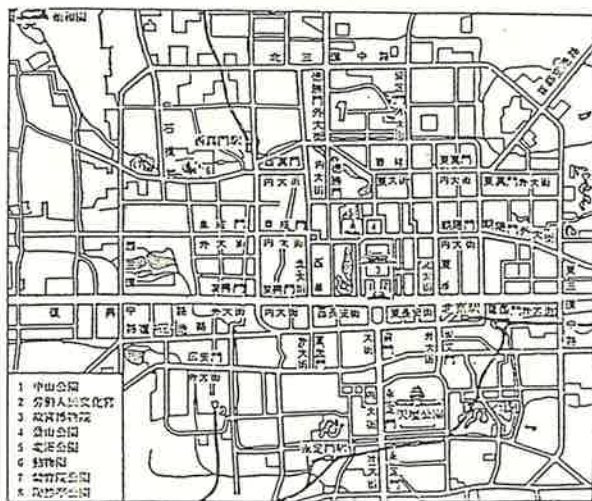
都となった。大都是その東西が南北よりやや長い長方形の、周囲 28.6 km に及ぶ巨大な城壁をめぐるしていた。「都城内はすべて方形に区画されること、あたかも将棋盤のごとく、その美しさ、巧みな配置ぶりに至ってはとうてい筆舌の及ぶところではない」とマルコ・ポーロは『東方見聞録』に記し、大都の街並みが幾筋もの直線的な道で 50 の坊に区切られ、左右対称に配置された都城造営の巧みに舌を巻いている。

明は元を滅ぼした後に、明の成祖（永楽帝）が元の宮殿を取りこわし北京城を建設し南京から北京への遷都を実施した。この北京故宮すなわち紫禁城は敷地 70 万㎡を有し、建坪は 15 万㎡である。このなかで主な建物は皇極、中極、建極（今日では太和、中和、保和と称される）の三大殿であり、この他に郊外に今も残る天壇、地壇、朝日壇、夕日壇も造られた。明の北京城においては、雄大な建築群を通じて封建的な皇権を最高峰まで押し上げた。

清は明の制度を継承したが、北京城の配置についてもさほど大きな改造を行わず、明代の造営をさらに拡大し清朝風の改変を加えただけである。ただ遠くの山水の美景を取り入れた西郊外の圓明園と頤和園は、山水の美と宮殿建築を巧みに結びつけた。（圓明園は八国連合軍の略奪と放火によって破壊された。）

清末から約 100 年間、1949 年に解放されて

図 2 北京略図





人民中国の新首都となるまで、北京はしばしば外国軍の侵略の対象とされ、しずかな古都の平和も繁栄も犠牲にされた。人民中国の首都に生まれかわってから、北京は現代化した全国的政治、経済、文化の中心地としての建設が展開された。

建国当初の北京は満身創痍であり、古ぼけてぼろぼろの状態にあった。当時の北京は、半封建的都城の寄生性を継承するとともに、非生産性の都市であった。現在の北京は、政治の中心であるとともに、消費性の都市から生産性都市への転換をとげた。(図2)

## (2)長 春(「新京」)タイプ

### ◎長 春(旧、「新京」)

1932年3月、日本の主導のもとにカイライ国家の「満州国」が成立し、首都に長春が選ばれ「新京」と命名された。1932年3月～11月に、関東軍を中心に満鉄、満州国が共同で都市計画を立案した。「新京」の都市計画には、日本のすぐれた都市計画、建築の専門家が、日本本土では実施不可能な計画を思い切って実施してみようとの意欲が発揮された。「新京」の都市計画の特徴をあげてみよう。(図3と4)

#### ①街路

幅の広い多心放射状の幹線道路と区画街路を上手に混合し、その交差は直交するように工夫している。

#### ②公園緑地と下水道

新市街は全域、水洗トイレを使用することにし、下水道は分流式とし、雨水は公園内の人工湖に流す。

#### ③官庁街の建築様式

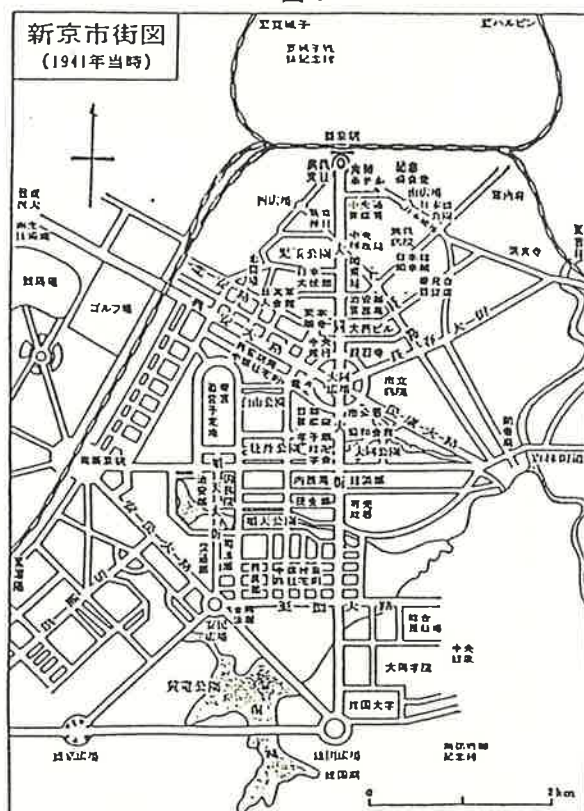
いわゆる「興亜式」という建築様式として統一的な街並みをつくる。「興亜式」は、鉄筋コンクリート造りに東アジア伝統建築スタイルの屋根をのせるという点では、日本の帝冠様式—JR奈良駅や愛知県庁舎などか—、中華人民共和国の民族形式と本質的に同一といえる。

だが、中国人がもっぱら居住した旧い市街は立ち遅れた施設や狭小な住居のままであった。

図3



図4



## (3)天津・上海タイプ

### ◎天 津

(複数の帝国主義国がそれぞれ租界を形成して近代都市をきずき、華界—中国人だけが居住

する地域—は別個に発展する、というタイプについては、上海を中心にのべるが、まず天津について略述しておく。

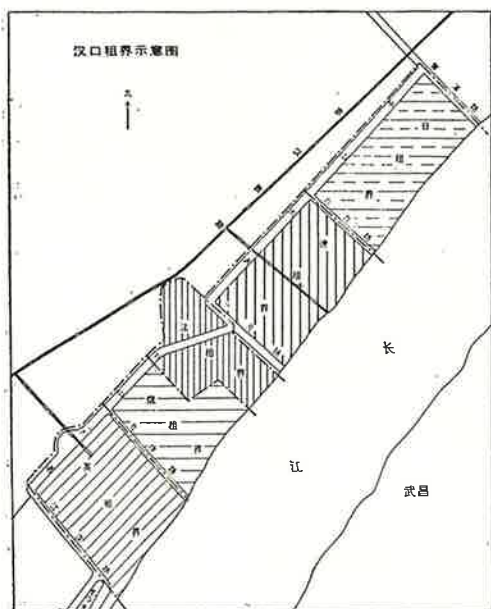
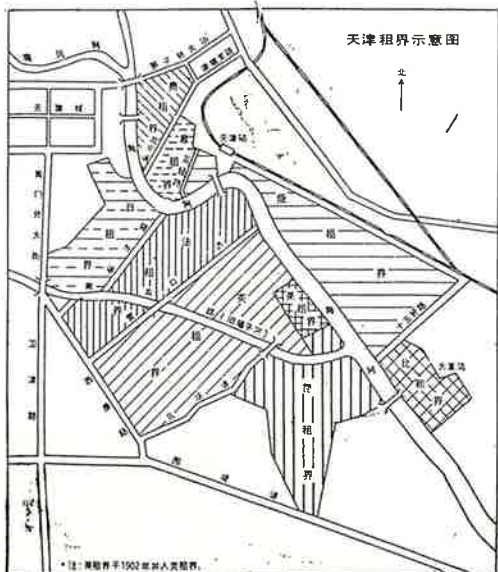
第2次阿片戦争の間、英・佛連合軍は3回にわたって天津に侵攻し、＜天津条約＞に次いで調印した＜北京条約＞にもとづいて、清国政府はやむをえず天津を通商港として開放した。こ

の時から天津は半植民地の市街となった。

1860年に天津は港を開放し、英・佛・米国は天津市街の南にある紫竹林一帯の海河兩岸に租界を画定した。甲午戦争（日清戦争）後に、ドイツ・日本は相前後して租界を定め、英国も租界をいっそう拡大した。八国連合軍の侵入後に、ロシア、オーストリア・ハンガリー帝国、イタリア、ベルギーの4国も租界を定め、英、佛、ドイツ、日本はまた租界を拡張した。その結果、全租界の面積は1330ヘクタールに達し、旧市街の9倍を上回り、天津の海域に通ずる要衝を制圧した。

帝国主義各国は、租界内に軍隊を駐屯させ、工部局、巡捕房、刑務所、法廷を設け、洋行倉庫、銀行を置き、埠頭をつくり、交易商業などのため土地を購入し建物をつくったりした。帝国主義諸国はまた、天津における租界を通して中国に政治・経済・軍事面での勢力拡張の活動を行なった。（図5）

図5 天津および漢口租界



## ◎上海

阿片戦争によって上海は開港することになり、イギリス、アメリカがそれぞれ租界を設け、のちに両者は公共租界（共同租界）となり、さらにフランスは別にフランス租界を設置し、こうして上海は複数の帝国主義がそれぞれの租界を形成して近代的都市として成長した。中国人がもっぱら居住していた華界は、これとは別個に存在した。

上海という都市は、日本の幕末から明治、大正、昭和初期まで、日本人にとって最も身近な西欧式・近代的大都市であった。一例として高杉晋作が受けた強い印象を見ておこう。徳川幕府は1862年（文久2年）に千歳丸を上海に派遣したが、その一行に長州藩の高杉晋作、薩摩藩の五代才助（友厚）などが参加した。「五月六日午前漸く上海港に到る。ここは支那第一の繁津港なり。歐羅巴諸邦の商船、軍艦数千艘碇泊す。檣花林津として津口を埋めんと欲す。陸上は則ち諸邦の商艦紛壁千尺殆ど城閤の如し。其の广大嚴烈たること筆紙をもって尽すべからざるなり」。（遊清五録）

出所：「列強在中国的租界」1992年中国文史出版社

## 2. 上海の都市形成と発展

上海という町が生まれ大都市にまで発展する歴史的過程は長く複雑であり、私はすでに『世界の大都市 上海』で概観してきた。

この不可思議な魅力をもつ都市の形成と発展は幾人かの文人によっても興趣の対象となっているようである。

「あの頃（1930年頃）の上海のようなミクストされた、ミクストされる事情にある港市は、これまでも、この後も、世界じゅうにあまり見当たらないことになるのではあるまいか。この土地は、二千年前は呉楚の土地で、楚の春申君の故地なので、いまだにこの土地を申とよぶ。滬とよぶのは、その字が河なかの矢来を意味していて、揚子江の支流呉淞江の流れ落ちる手前に栄えたのでそれを呼び名にしたものであろう。もとより中原からは取り外された僻地で、揚子江の沈澱でできたこの下湿の地が、開化的な今日の都会の姿になったのは、イギリスの植民地主義が、支那東岸に侵略の足場を求めて、この最良の投錨地をさがしあて、湊づくりをはじめて以来のことで、それから今日まで、まだ百年ちょっとしか経っていない。もうその頃からこのへんは、戦火の衝で、幾度となく瓦礫地にかえり、それ以前には、くり返し倭寇が荒らしまわっていたものであった。今日でも上海は、漆喰と煉瓦と赤瓦の屋根とでできた横ひろがりにはひろがっただけの、なんの面白味もない街ではあるが、雑多な風俗の混淆や、世界の屑、ながれものの落ちて集まるところとしてのやくざな魅力で衆目を寄せ、干いた赤いかさぶたのように、それはつづいていた。」（金子光晴『どくろ杯』）中公文庫。

### (1) 呉城の建設・華界の発展

上海に呉城が造設されたのは、金子光晴の文章にも出てくる、明初から明末にかけて、しばしば行われた倭寇の来襲から住民を守るためであった。倭寇が江南一帯に出没して掠奪をほしいまにすようになったのは、明の太祖の頃

（洪武2年、1369年）からで、世宗の嘉靖（1552年より）には激しさを増した。とくに嘉靖32年（1553年）の2月には南匯、3月、青村。4月、大倉、崇明、蘇州。5月、華亭、高昌、呉淞、海寧、乍浦。8月、常熟。9月、金山。10月、南沙、宝山。11月、南匯、呉淞を襲うという状況であった。この年9月、度重なる倭寇の来襲から住民の安全を守るため築城を開始し、11月に完成した。これ以後、倭寇の来襲や戦乱のあるたびに住民は呉城に避難し、ために呉城を中心に人口はきわめて稠密となった。上海はこれから呉城を基礎として発展するが、華界は呉城の南にひろがる南市、蘇州河の北の閘北、その東側の江湾を中心として形成・発展をみた。

### (2) 租界の設立・拡張

(イ)阿片戦争の結果、上海は開港することになったが、イギリスは居留地用の土地を要求し、はじめてイギリス租界が呉城の北で蘇州河が黄浦江に合流する地点に1846年設立された。湿润で芦が生えていた土地であるが、植民主義者がこの要衝の地を選定した炯眼は誠に驚くべきものである。

アメリカは、蘇州河を越えた北側の虹口地域——のちに日本人が多く居留することになった土地——に1848年に租界を設立した。

このイギリス租界とアメリカ租界は合併して1863年には公共租界（日本では共同租界と称した）となった。日本人は公共租界の一面の虹口地域に密集して居住するようになり、「日本租界」と称する人もいるが公式の名称ではない。

フランスは呉城の北から現在の延安東路の間の地域に租界を1849年に設定し、そこから西へ西へと拡張した。

植民主義者が初めに設立した租界は、イギリス租界が僅か0.56km<sup>2</sup>であり、フランス租界は0.66km<sup>2</sup>であったが、黄浦江および呉城が位置していたため外灘（黄浦江沿いの地域、バンドと称される）から西へ西へと拡張していき、また蘇州河以北では上海—呉淞間の鉄道より東に拡げていった。



(ロ)越界築路の役割。植民主義者が租界や支配地域を拡張するようになった要因のひとつとして「越界築路」の問題がある。1860年に太平天国の軍隊が上海の街をうかがうようになった時、イギリス将校は租界に接続して軍用道路をつくり太平天国軍との戦闘に利用した。これが越界築路の端をひらいたのであり、新たな軍用道路に囲まれた地域は租界に準じた扱いを受け、租界拡張の導線となった。

租界に多数の中国人が居住するようになったのは、はやくも1853年、小刀会の蜂起軍が上海の県城を襲い、県内外の難民が租界になだれこんだことに始まる。租界当局は、家屋を建設して中国人に貸し出せば大きい利益を獲得できると考え、中国人を入れることにした。1860年および62年に上海が太平天国運動にまきこまれるや、租界に流入する中国人難民の数はさらに増した。

(ハ)「国のなかの国」。租界は、中国政府の直接管轄を受けない「国のなかの国」という特殊な状態を呈し、これが人口流動を加速し、人口の集中をもたらした。1853年、太平天国の運動にさいし、外国植民主義者は武装組織である「上海義勇隊」(万国商団)を成立させ、翌54年、情勢緊迫の機に乗じて、租界の「政府」ともいべき、英、米、仏、3国の「工部局」(行政機関。のちフランス租界は「公董局」を独立させた)および警察機構たる「巡捕房」を組織した。1860年代中期には、外人を主とした司法機関である「会審衙門」を設立し、本来、中国人裁判官の所管事項に属すべきものといえども外人関係事項には外人官憲が会審することにした。

西方の植民主義者は、これらの機構をつうじて租界の行政、立法、警察および一部の司法権等の主権を略取し、租界はしだいに「国のなかの国」と化していった。

(ニ)戦乱において安全な地位。先述のように、「国のなかの国」であったがために、租界は近代中国が遭遇した歴次の戦乱や社会的動乱において「特殊」な「安全」な状態を保つことになり、繁栄を謳歌することに結びついた。

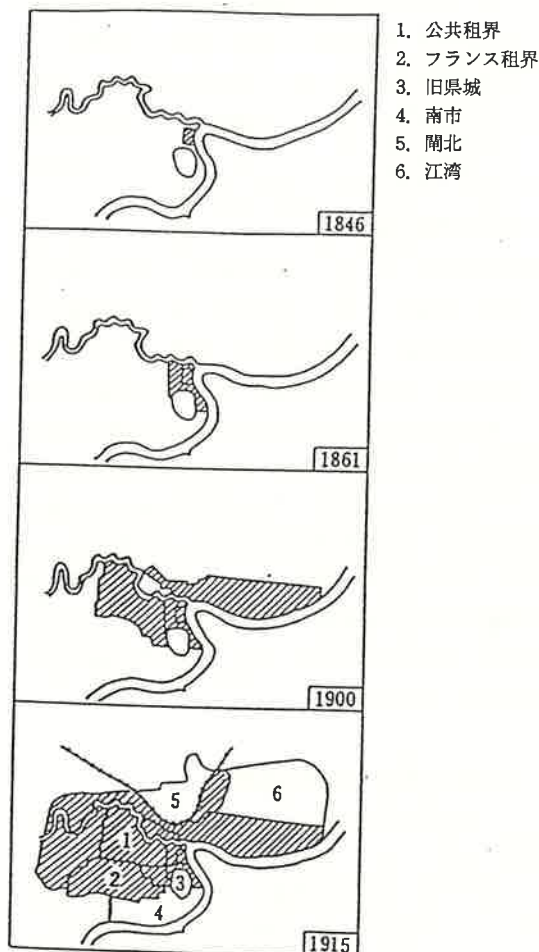
1853年の小刀会蜂起、1860年ころの太平天国革命にあたっての難民の襲来が、上海租界にたいする第1次の人口大襲撃ということが出来る。

1911年、辛亥革命時の人口襲撃について、1932年1月28日および1937年8月13日に始まる日本軍の上海攻略(2回の上海事変)にもなって人口の第2次大襲撃があった。

この時につづく第3次の人口大襲撃は、1946年～49年の第3次国内革命戦争(国共内戦)である。

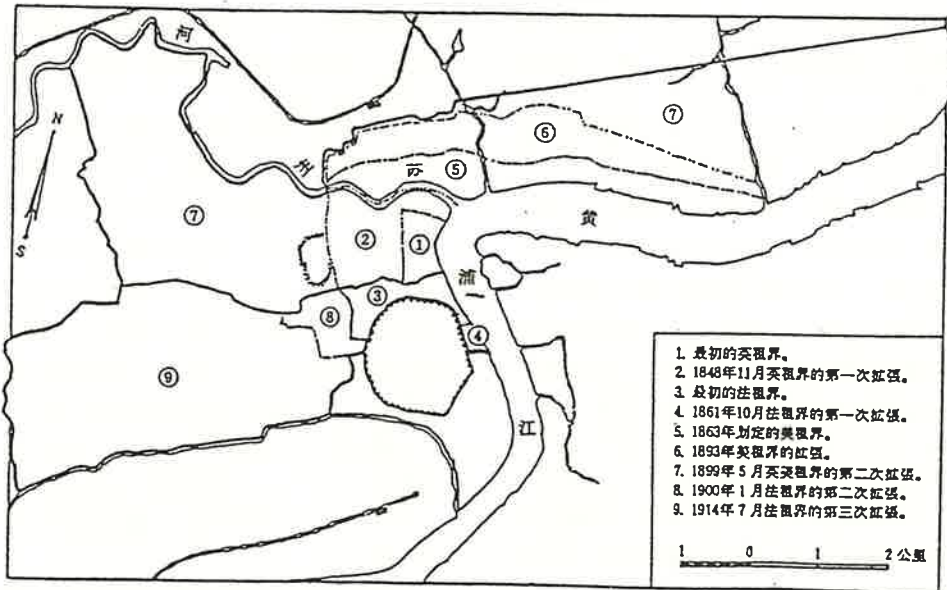
(ホ)工場と住宅の接近。上海のこのような歴史は、工場と住宅の接近・混在という都市問題の禍根を生むことになる。

図6 上海の租界拡張と華界



出所:「中国建築史」中国建筑出版社、1982年

図7 上海租界拡張図



出所：「上海近代史 上冊」華東師範大学出版社、1985年

外国資本は、運輸と経営の便利のためから黄浦江・蘇州河の沿岸に工場を設立し、中国資本もこれになった。租界の設立以降、いくつかの工業区が形成され、大多数の工場がこれらに集中していた。しかし1937年8月、日本軍の攻撃が始まり、工業分布が大きく乱れた。日本軍は華界北部の閘北、江湾を、南部の南市を攻撃・破壊した。当時上海にあった合計5000余の工場のうち、砲火にあい損壊したもの2000で、その他の大量の小型工場が租界内に移転し、工業分布を不合理なものにした。

1949年5月の上海解放前には10079の工場のうち、数箇の集中した工業区に合計2263の工場があり22.5%を占めるのみで、非工業区にある工場が7816で77.5%を占めていた。しかもそのうち住宅区にあるものが5886もあり58.4%を占めていた。こうして全市の半ば以上の工場とくに数多くの小型工場が住宅区内に分布し、工場と住宅が混在する不合理な状態を呈していた。ひどいことには、多くの燃えやすい、爆発しやすい、有害な工場も住宅区に分布していた。このように非工業区において工場と住宅が混在したが、工業区においては工場と棚户（スラム）が隣接していた。（図6と7）

### (3) プラスとマイナスの遺産

華界と租界がこのような別個の発展をとげたことは、上海にプラスとマイナスの遺産を残すことになった。

#### (イ) 人口の稠密

人口密度でみると1平方kmにつき、公共租界で1865～66年に3万7758人、1940年～42年に7万0162人であった。フランス租界では同時期に7万3585人、8万3599人という驚くべき人口稠密の状態を呈した。

華界でも人口稠密の様相には変わりがなく、30の警察管轄別でみると、1平方kmにつき1万人以上の地域が15、うち2～5万人が1、5～10万人が7、10万人以上が3ヵ所あった。

#### (ロ) 工場と住宅の混在。前述のとおり。

#### (ハ) 道路の幅員や方向

租界が越界築路とともに西へ西へと拡張していったので、道路は東西の方向に発展し、南北の幹線道路がなかった。道路の幅員が狭く（平均7.5m、南京路だけ15m）、また道路と道路との距離が短く、交叉点多すぎるといった特徴が残された。

#### (ニ) 住宅、居住条件の格差

旧上海における居住区の発展は、外国人およ



び中国人の上層階級が、市の中心部から逃避し、近郊に新しい居住区をつくり、市の中心部には人口が密集し、建築物がひしめく、という歴史でもあった。

租界の西方への拡張に応じて、住民の質もほぼ西へ行くほど高く、最後に形成されたフランス租界の西の虹橋路一帯が最高である。租界内の街路沿いには洋行、オフィス、商店等が建ち、街の背後には、いわゆる里弄式住宅など密集した建築物が建てられた。さらに、工業区や倉庫区や、鉄道の周囲には棚戸（スラム）区が形成され、居住条件は劣悪きまるものであった。（ホ）水道、石炭ガス、電力等の公共事業はアジアでは最も早くから経営され、租界の西方近代文明を支えてきた。しかし公共事業の大部分は外商によって経営され、各自で系統をつくり分割状態におかれた。

上水道 イギリス商、フランス商はそれぞれ別に供水管網をつくった。

石炭ガス イギリス商が創業し公共租界とフランス租界に供給していた。ただ供給範囲は限られ、華界内では日中戦争前に使用戸数が数千戸きりであった。

電力 公共租界では220ボルト、フランス租界では110ボルトということは租界が各自に系統をつくっている象徴であった。解放後もしばらくは調整が困難をきたしたが、現在では220ボルトに統一されている。

公園 いくつかの美しい公園が造られたが、黄浦公園に「犬と華人は入るべからず」の立札が掲げられ中国人の憤激を招いたことは租界の一面を象徴していた。

（ヘ） 壮麗な建造物を残した人たち

黄浦江から上海を望むと様々な姿と形式の壮麗な建造物人がびとを迎えてくれる。歴史を顧る者にとっては、格別の感慨が湧きあがるはずである。

「其美租界と英租界の間の花園大橋より英租界をつらぬき法租界に到る一条の道路は実に第一の壮観となす。左は是、満々たる大江、軍艦・商船橋を連ね、右は是、峨々たる高樓・瓦をつらね軒を接す。其の間一条の道や両傍樹木を

植う。樹下の人道は東西外人や中華人、老若男女肩を摩して行くところ、中央の大路、馬車・人車・自転車、争ひて進む。真に是、東洋第一の貿易港に恥じず」

永井荷風は明治30年（1897年）、黄浦江岸の外灘をこのように描写している。私は、『世界の大都市 上海』の序文に叙述しておいた。「船の旅であれば、東中国海の青い海がいつの間にか次第に黄色くなって長江の河口に近づいたことを人は知ることができる。呉淞口から黄浦江をさかのぼっていくと、右前方にそって並ぶ雄大なビル群が立ち現われてくる。」

上海大厦、中国銀行上海分行、和平飯店、上海市总工会ビル、上海税関、上海市人民政府ビルとつづくビルの群は、上海の強烈な第一印象となろう。

これらの雄大壮麗な建造物を残した人たちは主に藤原恵洋「上海」によって一見しておこう。

○ 怡和洋行（Jardine Matheson）

彼は亜片の密輸貿易の最大の立役者で、亜片戦争・南京条約の後にも亜片貿易で突出しており、東アジア最大の商社を形成した。上海には開港と同時に入り、1843年に怡和洋行を開設。海運貿易を中心に、機械・製糸・紡績・タバコ・化学・醸造と幅広くトラストをつくった。

○ 沙遜洋行（Sassoon）

亜片貿易、綿布の交易で利益をあげ、上海の租界拡張に歩をあわせて不動産経営をおこなってきた。1877年に外灘（バンド）に敷地を買いとり本拠地を定め、ここに1929年、本社ビル「サッスーン・ハウス」を建てた。現在の和平飯店北楼である。

○ ハルドゥーン（哈同、Silas Aaron Hardoon）

彼はSassoonで働き、亜片、皮革製品および金融投機で利益をあげ、1901年、「哈同洋行」をきずき、不動産で財をなした。

上海の中心地に最大の華麗な花園—ハルドゥーン花園をつくった。現在の工業展覽館である。

### 3. 解放後の上海 都市建設にむけて

インフラストラクチャ（道路、電力、ガス、水道等）が相対的に進んでいたこと、近代的建

建築物のストックが大量に残ったこと、都市の中心部が戦禍をまぬがれたことは、既存の建築物を活用する政府の方針とあいまって、解放後、上海で思いきった都市建設を不可能にした。

この問題については、私は「上海の現代化建設」(大阪経済法科大学『経済学論集』第11巻第2号)で略述した。ここで特に記述しておきたいのは上海の経済発展戦略である。

一つは、上海が工業発展に重点をおいてきたことから、さらに進んで情報・金融・貿易のセンターとしての役割を発揮するように求められていることである。

二つ目は、広く上海経済区としての発展が構想されていることで、上海市、江蘇省、浙江省、安徽省、江西省の緊密な連合のなかでの発展戦略である。

三つ目は、浦東再開発である。近代から上海の発展は浦西地区を主軸に行われてきた。近年、本格的に取りあげられた浦東再開発であるが、単に工場を移転し、文化施設をつくり、人口を移転させるのではなく、環状道路、大橋、トンネルで連絡し、浦東、浦西の相互促進をねらうもの、と私は見たい。(図8と9)

図8 上海における浦東新区位置

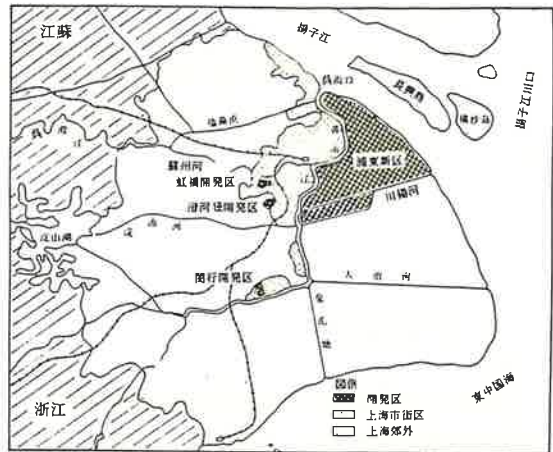


図9 上海浦東新区企画の略図



(注) 図8、9は「上海浦東新区の投資環境と発展の見通し」上海市人民政府浦東開発弁公室による。

#### 主要参考文献

##### (第一章)

- 「中国の諸都市」陳橋驛編著、1990年 大明堂
- 「西安の歴史巡歴」雷從雲、楊陽編著、1990年 外文出版社
- 「長安・洛陽物語」松浦友久、植木久行、1987年 集英社
- 「北京物語」林田慎之助、1987年 集英社
- 「上海物語」丸山昇、1988年 集英社
- 「中国の城郭都市」愛宕元、1991年 中央公論社
- 「アジアの都市と建築」加藤祐三編、1987年 鹿島出版会
- 「中国の旅 1. 北京とその周辺」とくに侯仁之論文、1979年 講談社
- 「中国の大都市」薛鳳施編著、1986年 商務印書館

##### (第二章)

- 「世界の大都市 上海」大阪市立大学経済研究所(杉野)編、1986年 東京大学出版会
- 「上海近代史」(上、下)劉恵吾編著、1985年 華東師範大学出版社
- 「上海の県城志」羽根田市治、1978年 竜溪書舎
- 「上海」藤原恵洋、1988年 講談社・現代新書
- 「上海公共租界史稿」1980年 上海人民出版社
- 「開国」田中彰編、日本近代思想体系1、1991年岩波書店
- 「倭寇」田中健夫、1982年 教育社
- 「上海経済発展戦略研究」1985年 上海人民出版社